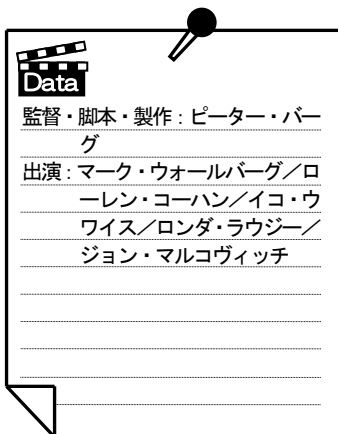




■■ショートコメント■■

◆主演のマーク・ウォールバーグがピーター・バーグ監督とのコンビを組むのは①『ローン・サバイバー』(13年)、『シネマ 32』286頁)、②『バーニング・オーシャン』(16年)、③『パトリオット・デイ』(16年)、『シネマ 40』未掲載)に続く4度目。これまでの3作はすべて実話に基づく作品だったが、スパイ・アクションものの本作は完全なフィクションらしい。

◆CIAでもトップクラスの能力を持つエージェントである主人公のジェームズ・シルバ(マーク・ウォールバーグ)は、アメリカで最も優秀とされる戦術部隊から選抜された極秘部隊「グラウンド・ブランチ」に所属する人物。他方、CIA分析官のビショップ(ジョン・マルコヴィッチ)率いる戦略チームが、「オーバーウォッチ」だ。彼ら両者の任務は、ロシアの工作員に奪われた放射性兵器の原料となるセシウムを奪い返すことだが、そのためには、その行方を知る唯一の重要参考人リー・ノア(イコ・ウワイズ)から情報を得る必要がある。なるほど、なるほど……。ピーター・バーグ監督が脚本を書いた本作には東西冷戦時代と同じようにアメリカの敵対国としてロシアが登場し、政府高官のヴェラ(ナターシャ・グブスカヤ)やロシア軍将校アレクサンドル(ニコライ・ニコラエフ)が盗まれたセシウムの行方を追うジェームズたちの動きを監視していたが、真の敵は架空の国インドカー。これは東南アジアの情勢不安定な国らしいが、ピーター・バーグ監督はなぜそんな設定に?そのため、そうでなくてもわかりにくい物語が余計ややこしいことに……。

◆本作はウィキペディアの評価では「本作は批評家から酷評されている。」とあり、『マイル22』は銃弾を放ったが大して飛ばせなかった。同作はアクションスリラー映画であり

ながらスリルを欠いており、同作を鑑賞することは持久走の苦しみに近いものを感じさせる。その意味で、タイトルはその出来栄に合ったものである。」と書かれている。また、新聞批評でも評価は低く、『キネマ旬報』2019年2月上旬号の「REVIEW 日本映画&外国映画」でも3人の評価はそれぞれ星3つだ。しかし、本作を鑑賞してみると、意外や意外、こりゃ面白い！もっとも、いかにも最近の映画らしく映像の切り替えスピードが早いいため、ストーリーを追うのが大変なのはもちろん。連続するアクションシーンを見ているだけでも大変。さらに、ジェームズのセリフのスピードはめっちゃ早いし、登場人物も多いから、とにかく大変。したがって、疲れることおびたしいが、観客ガラガラの中で鑑賞した値打ちあり！

◆本作のキーマンになるのは、情報の提供と引き換えにアメリカへの亡命を要求するインドカーの元警察官で情報屋のリー・ノア。ジェームズたちの部隊は大使館から22マイル（35.4キロメートル）離れた飛行場の移送機にこの男を無事に送り届けること。そうすれば、出国できた時点で彼の口からパスワードを聞かせてもらえるという条件だ。そんな設定でジェームズ率いる地上実践部隊とビショップ率いる戦略チームの両作戦が始まるが、それを阻止しようとするインドカーの“戦士”たちとの戦いは如何に？複雑かつ難解な設定だが、スリルとスピード感いっぱいの手汗握る“活劇”をしっかりと楽しみたい。ラストではきっとジェームズたちの任務は大成！そう思っていたが、実は・・・？そのどんでん返しと、次作への楽しみもしっかりと。

2019（平成31）年1月28日記